

財団だより

第102号

2004.6

多摩川



多摩川八景 その①

Photo & Text : 遠藤颯彦 (Hidehiko Endo)



■ 多摩川台公園 ■

1984年に行われたコンテストで選定された多摩川八景のひとつ、多摩川台公園は、古墳の上に設けられた公園で、春には桜を愛でる人、夏には涼を求める人で賑わう。眼下には、多摩川の大きなゆったりした流れを望むことができ、晴れた日には、対岸の川崎市の文化施設やサッカー場越しに、青い丹沢連邦の山並みが眺められる。公園直下には、かつて水道水を取水した調布堰がある。堰下は水遊びや魚釣りの子供達の格好の遊び場にもなっており、休日には子供達の賑やかなはしゃぎ声が絶えることがない。

東急の、東横線、目黒線、多摩川線の多摩川駅から徒歩5分。

Contents 目次

新しい「流域社会」へ	2
長期生態系観測の立ち上げに当って	3
多摩川をフィールドに	4
夏の風物詩「福生ほたる祭り」	5
ラブリバー運動の30年	6
'04年度研究助成選考結果	7
助成研究ワークショップ	8

巻頭言

新しい「流域社会」へ



神奈川新聞編集委員
谷津 孝一

新聞記者としての仕事をスタートしたのは今から33年前の1971年春。最初の赴任地が川崎だった。同年の統一地方選挙で初めての革新市長が誕生した直後のことで、街中には新しい時代への期待と不安が交錯していた。駆け出し記者の私も、ある種の興奮状態に包まれながら取材に駆け回ったことを覚えている。

最初は中原、高津、多摩(当時は稲田)の北部3地区を担当したが、折しも高度経済成長時代の開発ラッシュ。郊外の丘陵地では、ブルドーザーが地響きとともにうなり声を上げて走り回り、緑の雑木林があちこちで掘り返されては赤茶けた地面をむき出しにし、次々と新興住宅地に変身していた。

中でも驚いたのは、初めて見る多摩川の貧弱さと汚れのひどさだった。東京と川崎の間をゆったり流れる多摩川は、都会に住む人たちにとって格好の憩いの場としてシンボリックな役割を担っているものと想像していた。ところが河川敷に人の姿はまったくなく、よどんだ水が音もなかった。黙々と流れているだけで、死の川のような不気味ささえ感じられる。

河川敷こそ広々として立派だが、ごみの山だらけ。流れ込む支流は、どこもかしこも鼻を突く異臭を放っている。水量がまったく乏しいうえに、所々にある堰の周りには、合成洗剤の白い泡がいっぱ

いに広がり、なんとも異様な光景を醸し出していた。

高校時代まで過ごした仙台市の中心部を流れる広瀬川の明るい清流とはまるで違う様相に、「首都圏の川はどこもドブ川同然か」と大いに落胆させられたものだった。

「(汚染に強い)コイやフナさえ棲めなくなった」と肩を落とす川漁師の嘆きを取材したのは、ちょうどこのころだった。環境ホルモンの名付け親として知られる元横浜市大教授・井口泰泉さんが多摩川で採取したコイの精巣を調べたところ、極端に萎縮しメス化していることが分かった。化学物質による悪影響が野生生物の中で進んでいると警鐘を鳴らしたのは、まだ記憶に新しい。

そんな多摩川だったが最近では見違えるほど浄化が進み、アユの遡上が確認されるなど、かつての生命力あふれる流れが再びよみがえろうとしているのは大変うれしい。私の赴任から3年後に発足した当財団をはじめ、ボランティア団体や流域住民による力を合わせた清掃活動や合成洗剤追放の生活改善など、一つ一つの地道な努力がようやく実を結びつつあるため、その成果をともに喜びたい。

子供たちの自然体験、学習の場として国交省が提唱する「水辺の楽校」が昨年、昭島市にもオープンし流域では6カ所となった。川崎市中原区等々力にある「とどろき校」では4月下旬の日曜日、大勢の子供たちが集まって今年度の開校式が行われた。浅瀬で生き物を観察したり土手の野草を摘む子供たちの笑顔は、きれいになった川面と同様に日の光に輝いてまぶしく映った。

流域に住む430万人の人たちが、ふるさとの川としての愛着を持ち続け、川を軸にした新しいコミュニティづくりがさらに進むことを願っている。

《寄贈文献の紹介》

● 「たまびと、市民運動から“環境史観”へ」

著者 横山 十四男 2004年 百水社

著者は多摩川の自然保護活動の先駆けとも言われる1970年に設立された「多摩川の自然を守る会」に参画され代表も務められた。以来今日まで数多くの自然保護団体の代表に乞われ各団体のリーダーとして活動されている。これ等30年間の自然保護活動の実践報告と著者の環境観を“環境史観”として論じている。

● 「身近な水の環境科学」

著者 安富六郎・土器屋由紀子・楊 宗興・三原真智人

2004年 特定非営利活動法人 環境修復保全機構
前編は雨水の性質と水質について、後編は水循環過程で起こるさまざまな要因(森林の涵養機能・森林生態系、ダム・水田等の水利用、水質汚濁の原因と化学的分析等)、メカニズムを平易に解説している。また、住民による環境保全活動の事例を紹介している。

特別寄稿

長期生態系観測の立ち上げに当たって — LTERへの期待— 多摩川流域からの発信



東京農工大名誉教授
小倉 紀雄

地球温暖化や酸性雨など地球規模の環境変動に対する生態系の応答は遅く、影響が明らかになるまで多くの時間がかかります。そのため、生態系への影響を解明し、適切な対策を講じるためには長期間のモニタリングが重要です。長期生態系研究 (LTER) はアメリカ合衆国において1960年代から開始され、現在では24生態系サイトでモニタリングが実施されています。LTERサイトの一つであるハーバードブルック実験林では、ライケンズ博士らが渓流水集水域で物質収支の長期研究を開始し、酸性雨の生態系への影響などが明らかにされました。これらの成果は酸性雨の原因となる大気汚染物質の削減のための政策と法律立案に役立つ情報を提供することができました。LTERは国際的にも重要視され、現在、中国、韓国などのアジア諸国を含む27か国が参加して国際長期生態系研究 (ILTER) のネットワークが構築されています。

わが国ではILTERに未参加で、長期間の生態系モニタリングを実施する体制やサイトは十分に整備されていません。環境省では全国を自然環境を継続的に監視する重要生態系監視地域を設置する事業を2003年度から始め、今後山間部から都市部までさまざまな生

態系1000か所を選び、生物の生息状況などを100年間、監視を続けることにしています。日本生態学会や日本林学会では、大学演習林などで長期間観測されている森林生態系、水収支、水質などの測定成果を基に、ILTERへの参加について検討を開始しています。地球規模の環境インパクトに対する生態系への影響を適切に評価するために、国内のLTER体制を整備することが重要です。

多摩川流域内にある東京農工大学農学部附属フィールドミュージアム多摩丘陵 (FM多摩丘陵; 12.6ha) は都市圏に残された貴重な森林生態系で、大気汚染・酸性雨、水収支、物質循環、植生などさまざまな分野の研究が学内外の研究者により行われてきました。このサイトを利用して、とうきゅう環境浄化財団の研究助成による6課題の調査研究も行われています。そこで、今までの成果を生かし、空と水と緑に関する長期モニタリングを今後も継続するため、とうきゅう環境浄化財団の支援により、FM多摩丘陵は長期モニタリングステーションとして整備されることになりました。

一方、多摩川流域では多くの市民グループにより水質や動植物の調査が行われています。多摩川流域に市民と専門家が連携して長期のモニタリングを実施するサイトを整備し、地球規模の環境変動に対する水質や生態系の応答を継続的に調査することも重要と考えられます。このように多摩川流域からLTERの重要性を発信し、LTERを推進することにより生態系の保全と回復への有効な対策の提言に結びつけることを期待しています。

LTER・・・Long Term Ecological Research
ILTER・・・International L.T.E.R.



写真上部に浅川が流れている。宅地開発が間近まで迫っており、大都市に残された貴重な森林生態系であることがわかる。

◀ FM多摩丘陵全景

▼ 自然豊かなFM内



多摩川をフィールドにー 近くて遠かった多摩川



府中市立四谷小学校
(現、鳴門教育大学大学院在籍)

鳥羽 香織

四谷小学校は、教室の窓から多摩川を望むことができ歩いて5分ほどで、土手までいけるという多摩川での活動には、恵まれた場所に位置する。

とはいっても、総合学習で多摩川を取り上げる前までは、「多摩川は危険な場所」「多摩川はきれいではない。」という意識が強く、訪れることが少ない場所であった。私たちは、総合学習のスタートを前に、多摩川をもう一度見直してみた。すると次のような良い点が浮かび上がってきた。①なんといっても近い。繰り返しの活動ができる。②生活科や理科など教科学習での活動体験より、子供たちの興味関心をひく多様なものが存在することがわかっている。③上流から下流まで、変化に富んだ自然が存在し、様々な人のかかわりがある。④以上のことから考えても活動の広がりが予測できる。そこで、私たちは、多摩川という宝の山をフィールドとした活動をスタートした。

<活動を支えたもの>

子どもたちの思いを大切にすること

- 思いや願い、課題を表す場や時間を設定し、教師も子どもたちの思いを見取る工夫を続けた。
- ①エコック東京や多摩川センターなどと連携をとり多様な調べ活動にサポート出来るようにした。②事前に必ずフィールド調査を行い、展開される活動の予想を立てるとともに安全対策も検討した。③子どもたちが、繰り返して活動し、思いの実現に向かう時間を十分に確保した。

安全な活動を保障すること

- 1 多摩川センターや水辺のサポートセンターなど専門のスタッフの方々と連携をとり支援していただいた。2 事前、当日に現地に行き安全確認を行った。3 ライフジャケットなど安全に活動をおこなうために機材器具等を準備し(購入及びサポートセンターより借りる)、使い方の講習も行った。4 保護者に説明する機会をもち、ボランティアとしての活動を呼びかけた。

<活動からみられたことー心のふるさと多摩川へ>

子どもたちの意識の広がり

スタートしたときには、四谷小前の多摩川にある自然の事物を調べていく活動が主となった。それだけでも子どもの興味や関心を十分満足させるものをもっているフィールドではあったが、「もっと他の場所も調べたい。」と『上流(鳩ノ巣溪谷)から下流(羽田付近)に行く』活動になり、「調べたことを3年生や4年生に教えたい。」「他の学校の人に伝えたい。地域の人にも。』と『発表会を行おう』の活

動となり、人とのかかわりを生み出した。さらには、この活動を続けた子どもたちが、自由な発想での総合に取り組んだときに自らが『多摩川を楽しもう』の活動を選び、野草パーティー、多摩川で基地作りなどを行った。子どもたちが持っていた「学校での学習は～であるべきだ」という意識をも作りかえる活動への広がりが感じられる。

教師の意識の広がり

多摩川にある自然を想定してスタートした活動から、子どもたちの思いや願いをくみ取り一緒に活動を続けていく中で、『多摩川にかかわることを通して人へのかかわりに広がる活動』『多摩川を体験した子どもたちが、そこにこだわらず、さらに広がる活動』の素晴らしさに気づいていった。また、調べる活動だけではなく感性を豊かにする活動として、ネイチャーゲーム指導員の方と共に『川でのネイチャーゲーム』活動作りも行っている。

保護者の意識の広がり

子どもたちから活動を聞き、一緒に野草を摘みに出かけたり、バーベキューや、上流探索をしたりと休日を多摩川で過ごしたという声を聞くようになった。また、ボランティアで参加した活動支援は、PTAの多摩川学習活動サポート「のびる会」になった。「安全講習会」「野鳥観察会」を催すなど、子どもの学習サポートに加え、自分たちも積極的に多摩川にかかわり楽しむ活動へとつながってきている。

とにかく多摩川に行ってみようと手探りでスタートした活動であったが、私たちが思い描いていた以上に、そこは、魅力的な自然、人々、生活にあふれていた。この多摩川という宝の山にであったこと、そして、四谷小が取り続けている「多摩川を学ばせるのではなく、多摩川というフィールドを通して、自分の思いを実現する喜び楽しさを体験し、自分への自信を培っていく子どもを育てたい」という「子どもの思いから始める活動」が多くの方々の支えを得て、子どもたちや私たちに心のふるさと多摩川を作ってくれているように思う。現在、四谷小の総合学習は、多摩川をフィールドとするかどうか子どもたちと相談して作っていく『子どもが自分たちの思いや願いの実現に向けて活動をしていく』ことを主に進んでいる。



鳩ノ巣溪谷での調査活動

多摩川散歩

■ 夏の風物詩「福生ほたる祭」 ■

福生ホタル研究会 副会長 市川 重一

今年も、市民の手づくりの祭である「福生ほたる祭」が、6月12日(土)に開催される。この種の祭としては歴史は古く、数えて39回目である。遠くは東京23区などからも観賞者が訪れ、毎年3万人規模で賑わう福生市の夏の風物詩となっている。

福生市は、都心から西へ約40km、西多摩の玄関口にあたり、米軍横田基地を抱える人口6万2千人の住宅都市である。市内には多摩川及び玉川上水が流れ、緑も豊かであり、環境面では比較的恵まれた都市である。ただ、ほたるが育つ環境としては、都市化の影響を受け、自然発生は期待できないのが実態である。

昭和40年6月、玉川上水の五日市街道・牛浜橋付近から下流約500mの草むらでは驚くほどのほたるが自然発生した。ほたるは、玉川上水の隣接する民家の中まで飛んできたほどであった。今まで見たことのない光景をみて、当時の熊牛町会の中で、「ほたるを見たことのない人たちにも楽しんでもらうような行事を考えたらどうか」という声があがった。このことが、祭を開催するきっかけとなった。

以来、ほたる祭は、一町会の手づくりの祭として代々引き継がれてきた。「ほたる小唄」もでき、市民参加の

模擬店をはじめ、ちんどん屋、カラオケ大会、中学生による吹奏楽など、盛り沢山のもよおし物が祭を盛り上げるようになった。また、夜間開催ということから、交通事故、青少年の非行や怪我の防止には、特に配慮をしている。今では、福生市の地域の祭となり、テレビ、新聞などでも報道されるまでになってきた。

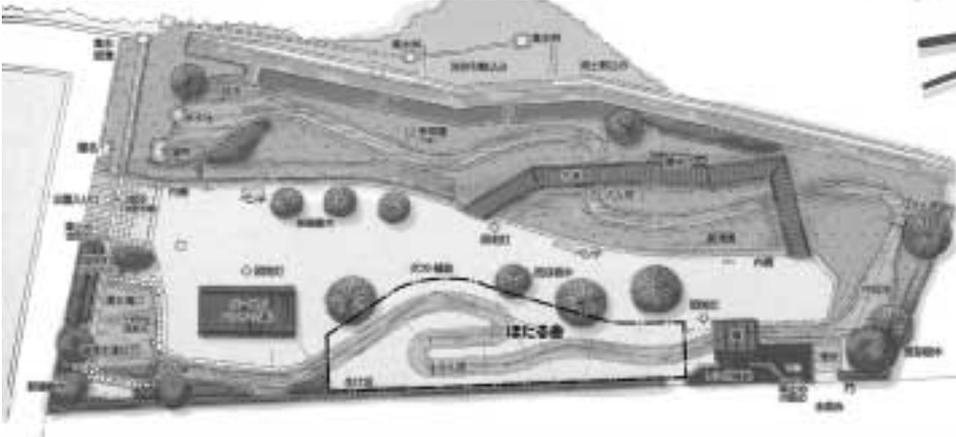
さて、祭の主役である「ほたる」であるが、自然発生が望めなくなったころ、地域の住みよい環境の創出、併せて祭の継続を目的に、町内の有志により「福生ホタル研究会」が発足し、養殖活動が始まった。活動場所は、自宅や多摩川の河岸段丘のハケから清水が湧き出る市立ほたる公園である。

平成5年4月、福生市では、既存のほたる公園の大改修を行なった。面積1,730m²養殖ドーム、150mの流れ、86mの深井戸が設置された公園に生まれ変わった。この公園が整備されたことにより、研究会の活動は飛躍的に活性化された。現在の会員数は、30名であり、市から公園の管理委託も受けており、年間を通じて市と協働でほたると餌になるカワニナの養殖活動を行なっている。

この4月19日には、最初の幼虫の上陸も確認している。暖かくなるにつれて幼虫の上陸数も増えることが期待でき、今年のはたると祭が盛大に開催できるよう、そして、ほたるの乱舞を想像しながら研究会員が一丸となってがんばっている今日のごろである。

施設の主な内容

場所	福生市南田園3-9-1
面積	1,730.07m ²
開設年月日	昭和48年3月15日 改修 平成5年
水路	幅1.3m長さ150mコンクリート造りで内面に「ほたるの幼虫」が登りやすいように松の半切りを設置 水が酸性にならないように底部に石灰石を敷く
滝池	「はけ」の湧水の酸素補給のため高さ1mの滝を設置する 深さ60cm、魚を飼ってその「ふん」がカワニナに良い
ほたる舎	最大幅9m 最小幅5m 長さ30m 高さ最大5m 最小3m
水道	長さ35m 幅1.95m
菖蒲園	500株
便益施設	便所(男女兼用、手洗い) 水飲み ※ 駐車場はありませんので、お気をつけて下さい。



福生市「福生ほたる公園」パンフレットより

私と多摩川



ラブリバー多摩川を愛する会
事務局長 西尾 安裕

「ラブリバー運動の30年」

1970年代は世界的に環境問題に対する関心が高まった時代で、私も環境問題の動きやエコロジー運動に強い関心を持っていました。

当時、5歳の息子と1歳の娘の父親として子どもたちの未来に大きな不安を持ち、何とかしなければいけないながらも何もできない自分にやり切れない気持ちを感じていました。

そんな時、知人にすすめられて世田谷区の成城大学講堂で開かれた東京青年会議所主催の「多摩川の環境を考える市民対話集会」(1972年9月)に参加しました。集会は、主催者の熱意は感じられるものの広い会場は閑散としていて数十人にも満たない聴衆がいるだけでした。私たちの生活と子供の未来に直結する身近な環境危機に対して、あまりにも少ない市民の参加を目の当たりにして、それが社会にとってどんなに有意義で重要な活動であっても、多くの人々に知ってもらい理解されなければ効果がないことを痛感しました。

当時の私は放送局に勤務していて、ともすればセンセーショナルリズムに走りがちなジャーナリズムの姿勢に強い疑問を感じていた時でもあったので、こうした運動を広く伝え、訴えることにジャーナリストとしての使命を見つけたような思いがしました。集会の終了後、落胆している主催者に声をかけお互いに志(こころざし)が同じであることを知りました。早速、会社の上司にマスコミの社会的使命として「多摩川の環境浄化キャンペーン」に取り組むべきだと説得し、1973年に東京青年会議所と共催で公共活動「ラブリバーキャンペーン」の実施にこぎつけました。

深夜番組で若者を中心にラブリバーを合言葉に川を好きになり、川をきれいにしようと呼びかけ、同時に多摩川の河原でサイクリングやコンサートなどの催しを実施しましたが、キャンペーンは1年で終了しました。キャンペーンを始めた時から多摩川の環境運動を継続するためには恒久的な公益法人の設立と地域の市民団体の設立が不可欠だと思っていたところに、東急

グループで多摩川の環境改善を目的とする財団を作りたいという話があり、財団設立の準備段階から設立までお手伝いをしました。

財団設立に当たって、大学や学者の研究や調査の助成だけでなく実際に地域で活動している市民グループやレクリエーションの開発にも助成すべきだと訴え、その考えを寄付行為の中に入れていただきました。

また、同じ時期に二子玉川の玉川高島屋ショッピングセンターの母体である玉川高島屋、東神開発のご支援もあって1975年には地域の市民活動「ラブリバー多摩川を愛する会」を設立することができました。

当時の環境運動は、無為無策の行政と環境悪化に担担する企業に対する正義の味方の市民運動という時代でしたが、私たちはこうした考え方についていけず、人の和を重視した市民と行政と企業が一体となって互いに協力しあう三位一体のラブリバー運動を提唱し、きょうまで続けてきました。

私たちの運動は当時の風潮に逆行し、派手さはなく地味で目立たないものでしたから「そんな生ぬるいやり方ではいつまでたっても多摩川はきれいにならない」「あなた達は企業や行政の手先だ」などと批判されたこともありました。これで良かったのだと思っています。

いま30年を振り返ってみますと、過激な運動はほとんど姿を消し、国土交通省の中にラブリバー制度という市民活動を支援する制度ができ三位一体の運動はあたりまえになりました。まだまだ十分とは言えませんが、30年前と比べると多摩川がきれいになったということが何にもましてうれしく思っています。(了)



loveriver 2003年秋

財団からのお知らせ



高橋選考委員長

去る3月9日第46回定時選考委員会を開催し、45件の応募案件を厳正に審査した結果、2004年度の新規助成研究として、以下の13件を選出致しました。

昨年より若干少なめの応募件数でしたが、学術研究分野は22%の採用率で、5件に1件の割合と、大変厳しい競争率となりました。また、昨年からの継続研究10件はいずれもその助成が認められましたので、2004年度は併せて23件の助成を致します。助成額は多額ではありませんが、多摩川とその流域の浄化を目指して、皆様の研究や活動に少しでもお役に立てるよう心がけておりますので、今後とも皆様の積極的なご応募をお待ちしております。

[2004年度研究助成選考結果]

〔学術研究〕

研 究 課 題	代表研究者	所 属
多摩川水系における落葉食河川底生動物の種多様性及び河川環境要因の影響解析	加賀谷 隆	東京大学 農学部 助手
多摩川における生態系多様性の評価：寄生虫を指標とし、地理情報システムを活用した方法の開発	杉山 広	国立感染症研究所 寄生動物部 主任研究官
多摩川水系に侵入した外来動物『フロリダヨコエビ』の分布・拡散の現状と生態系への影響予測	倉西 良一	千葉県立中央博物館 生態環境研究部 上席研究員
多摩川中流域における河川敷植生の復元と管理についての研究	一澤 麻子	横浜植生研究会
多摩川における早瀬の景観的特徴とその水理環境に関する研究	知花 武佳	東京大学大学院 工学系研究科 助手
多摩川水系飲用水に関する市民コーディネーター育成アカデミーの設立：生物作用水質モニターと水のヒト生命科学教育システムの構築	鈴木 信夫	千葉大学大学院 教授

〔一般研究〕

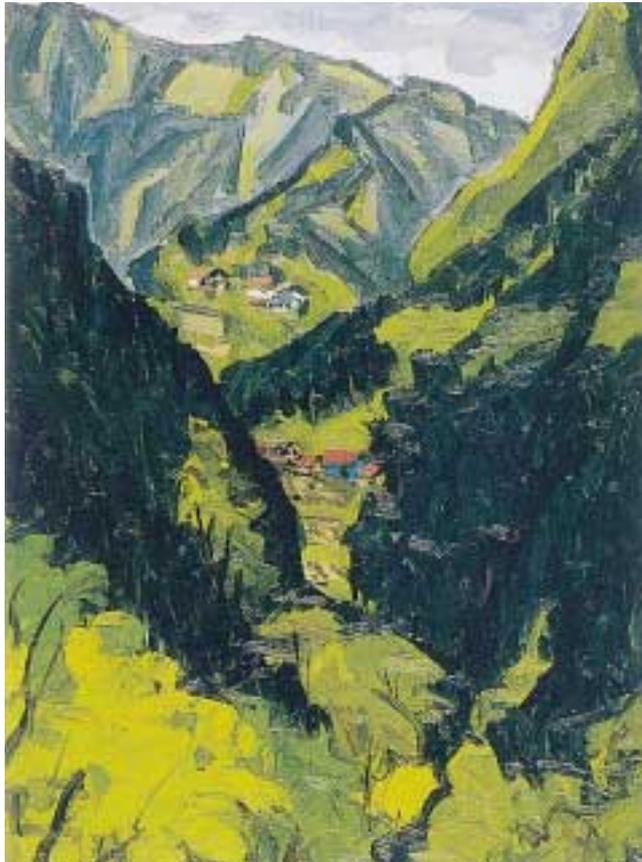
研 究 課 題	代表研究者	所 属
中央線沿線地域の雨水循環的活用可能性研究調査	黒岩 哲彦	NPO法人 グリーンネックレス 理 事
東京都の湧水等に出現する地下水生生物の調査	篠田 授樹	地域自然財産研究所 代表
多摩川中流のかつての田園地域における希少植物の生育確認調査	星野 順子	府中の植物を記録する会 世話人
多摩川中流域の水環境を題材としたプログラム開発と市民による学校支援体制システムの研究	杉山 典子	調布市環境学習サポーター
多摩川における地区河川環境モニタリング手法とその運用に係る人材育成に関する研究	横山十四男	多摩川流域リバーミュージアム 検討協議会 代表
武蔵野台地南部の水利用・水配分に関する教材化のための基礎研究	小坂 克信	鳴門教育大学院 修士課程
多摩川源流地域における狩猟文化史に関する研究	井村 礼恵	東京農工大学 連合大学院 博士課程

財団からのお知らせ

第10回 とうきゅう環境浄化財団 助成研究ワークショップのご案内

「川の風景を読む — 多摩川からの報告」

多摩川は全長138Kmの小さな川ですが、奥多摩の源流部の水滴に始まり、途中、植物や生き物の生命を育み、人々には安らぎや親水の間を与えながら、湧水や小川の流れを取り込んで、次第に大きな流れとなり、最新鋭機が飛び交う羽田空港横で、東京湾に注いでいます。この川は、古くは万葉集にも詠まれ、岡本かの子や川合玉堂を始めとする多くの文人や画人の作品にも登場するなど、その存在は多くの人々に愛され続けてきました。今、この川を取り巻く環境はどうなっているのか、その風景は人々の心に今後とも永く生き続けられるような豊かな風土感のあるものであるのだろうか。当財団の過去の助成研究の中から表題に関するものをいくつかご報告し、それらを土台にした討論を通して、多摩川のあるべき景観を模索します。



ご協力：財団法人 たましん地域文化財団

奥多摩日原 画家 菅野力蔵 山形県生まれ

県展を経て太平洋展出品 昭和55年白樹社結成

現在、白樹社展主宰、蒼騎会運営委員 あきる野市在住

プログラム

報告1 聖徳大学 非常勤講師 島村 勇二

①「多摩川における水面景観の変化に関する調査研究」

1993年～1995年助成

②「多摩川中流域の府中用水に関する調査研究」

1997年～2000年助成

報告2 多摩川源流研究所所長 中村 文明

「多摩川源流部の淵・滝・沢・尾根等の地名とその由来に関する調査研究」

(塩山・丹波編) 1997年～1999年助成

(小菅編) 2000年～2002年助成

(奥多摩編) 2002年～2004年助成

報告3 水みち研究会 代表 神谷 博

①「水みちマップ作成の為に調査研究—野川流域の湧水と地下水の流れの関係について—」1988年～1993年助成

②「野川流域における湧水保全モデルの開発に関する計画論的研究」2003年～2004年助成

コメンテーター 東京工業大学 名誉教授 中村 良夫

定員 100名 参加費 無料

日時 平成16年7月29日(木) 13:00～16:00

場所 国連大学 5階 Conference Hall

申込方法

往復ハガキに住所・氏名(勤務先の場合は役職名、自宅の場合は所属団体名)各々の電話番号を明記し事務局までご送付下さい。FAXでも可(要返信FAX番号)

申込〆切

お申込は先着順で定員になり次第〆切ります。

- 発行日 平成16年6月1日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150-0002 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)

TEL (03)3400-9142

FAX (03)3400-9141

ホームページ <http://home.q07.itscom.net/tokyuenv>

※印刷所 雄文社 〒330-0061 さいたま市浦和区常盤9-11-1 TEL (048)831-8125

